

プし、「たどらない」ほうがスムーズになることもあるのです。

このように、急行列車と各駅停車を必要に応じ使い分ける力を、「たどる力」と呼びます。

論理的思考力とは関係整理力ですから、接続関係を表す言葉、すなわち接続語を分類することによって、論理的思考力を分類することができます(91ページ参照)。このとき、厳密には「3つの力」から外れる「関係」が、二つあります。その働きについて、確認しておきましょう。

並列関係

複数のことながらが単純な同列で並べられている関係です。「また・または・しかも・あるいは・そして」などの接続語が用いられます。「朝あるいは夜」のような関係です。なお、「雨・雪・悪天候」の中で並列と言えるのは、「雨・雪」だけです。「悪天候」は「雨・雪」より抽象的ですから並列とは言えません(「雨・雪」と「悪天候」は同等関係)。

並列関係の接続語は具体例を列挙するときに使われるため、「言いかえる力」を鍛える中でおのずと学ぶこととなります。このため、「3つの力」と同格に扱ってはいけません。「様々な野菜を育てている。たとえば、大根、ニンジンなどの根菜類。また、トマト、キュウリなどの果菜類。あるいは、キャベツ、

レタスなどの葉菜類」といった文章において、「また」や「あるいは」は、実質的に「たとえば」とほとんど同様の意味を、読み手に届けていると言えますね。

なお、この例において、たとえば根菜と葉菜を対比的に例示することもできます。「根を食べる野菜もあり、また、葉を食べる野菜もある」など。この文では、根と葉が暗に対比されています。こういう場合、意味上は、並列関係が対比関係に近づくわけです。この場合も「くらべる力」に含めればよいため、「3つの力」と同格にする必要はありません。

補足関係

単純な同列ではなく、中心となる「A」があり、その上で「b」という補足情報が加えられるような関係です(A + b)。「ただ・ただし・実は・なお」などの接続語が用いられます。「僕は未成年です。ただし、あと一か月で二〇歳です」などといった使われ方になります。これらの接続語は、文字どおり補足の働きにとどまるものであり、主役ではありません。言いかえれば、文章の論理展開を支える骨組みとしての「関係」であるとは言えません。ですから、論理的思考の主たる技術からは外しても差し支えないと考え、「3つの力」には含めていません。